

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第81輯

三ヶ山西遺跡Ⅱ

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書

1994

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第81輯

三ヶ山西遺跡Ⅱ

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 9 4

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

三ヶ山西遺跡の所在する貝塚市三ツ松は、近木川右岸の木島谷と呼ばれる地域にあります。ここは近木川と三ヶ山丘陵に囲まれた緑豊かな田園地帯で、付近には行基の開基伝承のある木積観音寺や、観音信仰で有名な水間寺があります。この地域は律令制下では和泉国和泉郡木島郷に相当し、中世では木島荘という荘園に含まれていました。

三ヶ山西遺跡の発掘調査は、主要地方道枚方富田林泉佐野線建設に先立って実施されました。今年度で路線内の三ヶ山西遺跡の発掘調査は終了、貝塚市奥部では最大規模の調査となりました。

この調査では6世紀末から7世紀初頭の竪穴式住居や、中世初頭の大規模開発の様相などが明らかになりました。周辺の開発史を考える上で貴重な所見を提供するものと思われます。

本調査にあたってご協力頂いた大阪府土木部岸和田土木事務所、大阪府教育委員会、貝塚市教育委員会、その他地元関係各位に対して謝意を表します。

今後とも当協会の事業に対してご理解ご協力賜りますようお願い申し上げます。

平成6年3月

財團法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 岩井幹郎

例　　言

1. 本書は主要地方道枚方富田林泉佐野線建設予定地内に所在する三ヶ山西遺跡の第3次調査、4次調査に関する発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が調査を実施した。
3. 三ヶ山西遺跡の発掘調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会 調査課 技師 横田 明が担当した。現地調査は3次調査が1992年3月16日から1993年3月25日まで、4次調査が1993年4月17日から9月30日まで実施した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会及び地元各位の協力を得た。
5. 遺構写真撮影は横田 明が、遺物写真撮影は小倉 勝が担当した。
6. 調査にあたっては、当協会の発掘調査規程によって国土座標系第VI系を基準に4m区画の地区割をした。本文中及び挿図に使用した座標もこれに従い、座標数値はkm単位で記した。方位は座標北を示し、座標北よりは真北は東偏0度2分を磁北は西偏6度23分を測る。なお標高はT.P.で表示した。
7. 本書で用いた土壤色、及び土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖7版』(1987)による。
8. 本書の執筆は第1章から第5章までを横田 明が担当した。編集は横田 明が担当した。
9. 隣接地の貝塚市三ヶ山町で1992年度実施した「三ヶ山遺跡試掘調査」(事業名92-12三ヶ山試掘)の結果報告を附載した。
10. 上記試掘報告については、担当技師 田中一廣が、一切の作業を実施した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の方法	6
第4章 調査の成果	8
第1節 基本層序	8
第2節 試掘調査の結果	11
第3節 III層出土遺物について	11
第4節 A I～III区	14
第5節 B, C区	21
第6節 D I～III区	22
第7節 E区	28
第5章 まとめ	29
附 載 三ヶ山西遺跡試掘調査報告	34

挿図目次

第1図 調査地点	1
第2図 三ヶ山西遺跡とその周辺	3
第3図 調査区配置図	5
第4図 大阪府地域計画図の図割り	6
第5図 調査区区割図	7
第6図 三ヶ山西遺跡土層模式図（1）	9
第7図 三ヶ山西遺跡土層模式図（2）	10
第8図 試掘調査区土層柱状図（1）	12
第9図 試掘調査区土層柱状図（2）	13
第10図 試掘調査区配置図	13
第11図 III層出土遺物	14
第12図 調査区平面図・断面図（1）A I～III区	15～16

第13図	510 - O R 土層断面図	17
第14図	528 - O R 土層断面図	17
第15図	529 - O R 土層断面図	17
第16図	調査区平面図・断面図(2) B.C区	19~20
第17図	528 - O R 直上出土土器	21
第18図	調査区平面図・断面図(3) D I ~ III, E区	23~24
第19図	142 - O D 平面・断面図	25
第20図	145 - O D 平面・断面図	26
第21図	190 - O D 平面・断面図	26
第22図	146 - O S 平面・断面図	27
第23図	A区と関係用水路	32
第24図	三ヶ山西遺跡周辺地形図	33
第25図	三ヶ山遺跡位置図	34
第26図	調査地とトレンチ位置図	35
第27図	トレンチ土層断面図	36

表 目 次

表1	III層出土遺物集計表	14
----	-------------	----

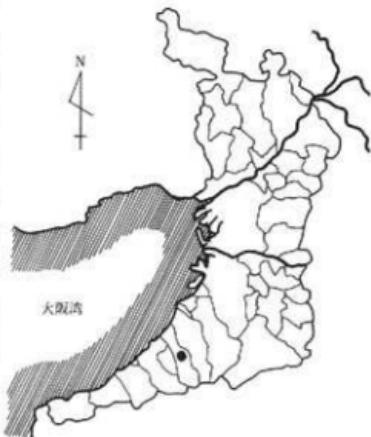
図 版 目 次

図版1	A区全景	図版9	D III区
図版2	A II区 510 - O R	図版10	D III区
図版3	A III区	図版11	D III区
図版4	B区	図版12	D I区・E区
図版5	B区	図版13	遺物
図版6	C区	図版14	三ヶ山遺跡
図版7	D II区		
図版8	D III区		

第1章 調査に至る経過

三ヶ山西遺跡は貝塚市三ツ松地内に所在する。本遺跡の発掘調査は主要地方道枚方富田林泉佐野線の建設に伴うものである。1984年まで主要地方道枚方富田林泉佐野線予定地内の調査は、大阪府教育委員会及び（財）大阪文化財センターによって実施されて来た。それ以後は関西新空港の開港が焦眉の課題となり、当路線が空港への重要なアクセス道路として位置付けられたため、空港関連事業の文化財調査の一環として当協会が現地調査を担当している。

1990年には大阪府土木部によって、共同溝埋設工事が計画された。工事に先立って試掘



第1図 調査地点

調査を行ったところ、中世の遺物と遺構を確認、水間鉄道の両側約600mで本調査が実施された（1・2次調査、1990年度）。この調査の結果、水間鉄道の西側の調査区では7世紀初頭にまで遡ると思われる溝とピット群、そして東側の調査区では中世の小溝が検出された。

さらに空港の開港が目前となった1992年には、貝塚中央線以南の部分の工事の実施が急務となり、残りの部分の調査について大阪府教育委員会と大阪府土木部とで再度協議が行われた。統いて当協会が調査を担当することとなり、1992年度と1993年度に残りの部分の発掘調査を実施した。3次調査は1992年3月16日から1993年3月25日まで調査を実施した。まず試掘調査で遺構および包含層の有無を確認の後、府道岸和田牛滝山貝塚線の両側から調査に着手し、順次西側に移動した。また4次調査では、最後に残った貝塚中央線の西側のA区について調査を実施した。

第2章 位置と環境

三ヶ山西遺跡のある貝塚市は、大阪府の南部にある。北西部は大阪湾に面する平野であり、南東部は葛城山を最高峰とする和泉山地を介して和歌山県と接している。東側は岸和田市と接しており、西側は海岸よりの平野部が泉佐野市と、中央の丘陵地帯が熊取町と接している。

三ヶ山西遺跡は貝塚市の南部、近木川右岸の中位段丘上に立地しており、標高65～70mである。この段丘は東西3km、南北5.5kmの扇形で、東を三ヶ山丘陵と津田川に、西を七山丘陵と貝田川に画されており、中央には近木川が流れている。段丘南半部の丘陵に囲まれた地域は、木島谷と呼ばれる幅2.5km、長さ3.5kmの谷地形であり、三ヶ山西遺跡は木島谷の最奥部に位置する。この付近では近木川はやや蛇行しながら南流しており、谷は深く川床と段丘面との比高差は数m以上に及ぶ。

これまでの調査では、古墳時代末の掘立柱建物や溝、中世の溝などが見つかっている。木島谷奥部においても、古くから開発の手が加わっていた証である。

(遺跡分布)

本遺跡周辺の歴史的状況を時代順にながめてみる。

旧石器時代では海岸寺山遺跡、新井ノ池遺跡、脇浜遺跡など海岸部や丘陵麓の遺跡で、ナイフ形石器や剣片の出土が知られている。縄文時代では、貝塚市内では脇浜遺跡で自然流路の中から出土した晩期の土器が知られているだけである。ただ石器については畠中ドビガ谷遺跡、森B遺跡などで石器の出土が知られている。

弥生時代になると遺跡数は増加する。前期では沢遺跡や脇浜遺跡など海岸部で遺跡が知られる。中期には畠中遺跡、石才遺跡、清見遺跡、海岸寺山遺跡など平野部の遺跡の他に、木島谷でも森B遺跡が知られている。段丘の上方まで開発が進展したようである。後期では新井ノ池遺跡、石才遺跡、脇浜遺跡などでV様式後半を中心で発見されている。

古墳時代では全長72mの前方後円墳丸山古墳（前期末～中期）の他、地蔵堂でも古式須恵器を伴う円墳が知られている。集落は前期では畠中遺跡、脇浜遺跡、中期では今池遺跡、沢共同墓地遺跡の他、竪穴住居の知られる堀遺跡、大型の掘立柱建物の検出された石才南遺跡がある。後期では当遺跡と畠中遺跡で竪穴住居が発見されている。須恵器窯は海岸寺山窯跡の他、三ツ松遺跡でも存在の可能性が指摘されている。



第2図 三ヶ山西遺跡とその周辺

飛鳥～奈良時代では7世紀代には、畠中遺跡、堀遺跡、半田遺跡、森B遺跡、清児遺跡、秦庵寺などがある。8世紀には畠中遺跡、沢遺跡、清児遺跡がある。当遺跡に近い森B遺跡では8世紀前半の大溝が検出されている。秦庵寺、畠中遺跡、堂ノ上庵寺で瓦の出土が知られている。

平安時代には、前期（9～10世紀）には畠中遺跡、堀遺跡、清児遺跡で集落が確認されている。後期には濱池遺跡で建物が確認されている。瓦は水間寺、地蔵堂庵寺、窪田庵寺、明楽寺跡、高井天神庵寺などで確認されている。

鎌倉時代には地蔵堂庵寺、王子遺跡、濱池遺跡、畠中遺跡で集落が確認されている。それ以外にも、各所で耕土の中から瓦器が出土しており、面的な開発の進行を推測させる。

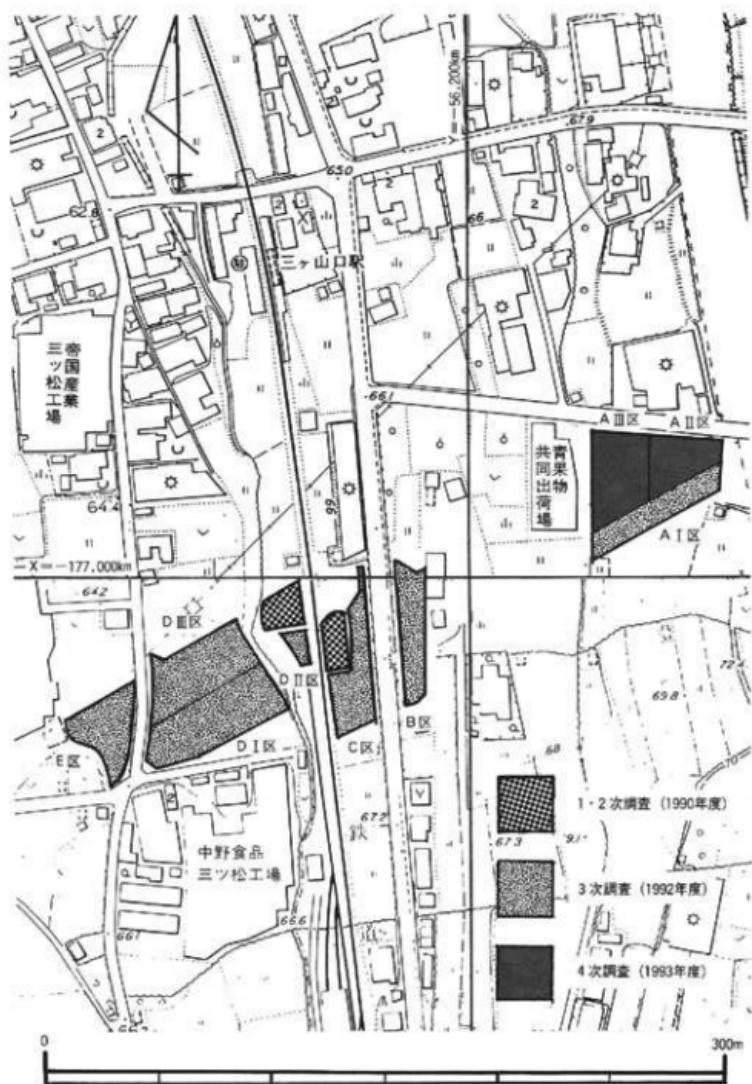
戦国時代には守護細川氏や、在地土豪を巻き込んだ戦乱に相次いで見舞われる。戦乱の拠点として積善寺城、根福寺城、千石堀城、高井城、沢城などが築かれた。

（文献から見た歴史環境）

文献から見た地域の歴史的状況についても触れたい。

律令制下では貝塚市東部は和泉国と泉州木島郷に含まれておらず、三ツ松周辺は水間里と呼ばれていた。当遺跡の南方には行基開創伝説のある水間寺と木積観音寺跡がある。水間寺は寺伝によると、天平16（744）年に聖武天皇の勅願によって行基が四十九院のひとつとして開いたという。観音寺は神龜3（726）に行基によって創建され、桓武天皇によって寺領が下賜されたと伝えられる。現在は、隣接する孝恩寺と合併され、孝恩寺釤無堂と呼ばれている。釤無堂は鎌倉時代の建築で、現在国宝に指定されている。

鎌倉時代前半には、当地一帯に「木島荘」が立庄される。宝治2（1248）年の關東下知状（久米田寺文書）には、「木島新庄」「木島郷被庄号」と見え、この頃木島荘が立庄されたことが判明する。立庄にあたっては同郷内にあった久米田寺の免田3町余が収公されている。木島荘は上方と下方に分かれており、鎌倉時代時代末には北条氏一門の得宗領で、室町期には河内教興寺領となっている。



第3図 調査区配置図

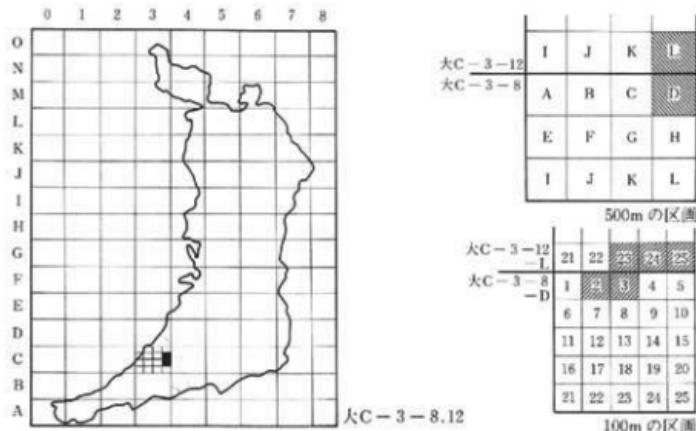
第3章 調査の方法

本報告所載の発掘調査は、1990年度の調査に続くもので、調査対象地区は路線用地内に設定した。現地は段丘状地形で、既設の鉄道や道路によって分断されており、東側貝塚中央線側から便宜的にA～H区までの地区名を付した。当初はC、D、E区の本調査とそれ以外の地区的試掘調査を並行して実施した。試掘調査の結果、A、B区でも本調査が必要と判断されたので、A、B区でも本調査を実施することとなった。

調査に当たっては、現耕作土は重機で除去し、以下層位毎に人力で掘削を繰り返した。さらに調査区周囲に断ち割り溝を設定して上層のひろがりにも留意した。

遺構及び遺物の取り上げについては、国土地理院第VI系を基準にした 4×4 m地区割を用いた。この区画の手順は、

- ①大阪府発行の新版1/2500地形図を12等分して、500mの大区画を作る。
- ②さらに大区画を25等分して100mの中区画をつくり、北西端から東へ01～25の番号を与える。
- ③その中区画を625等分して 4×4 mの小区画をつくって、AA、AB、YYというよう、A～Yの記号の組み合わせで記した。



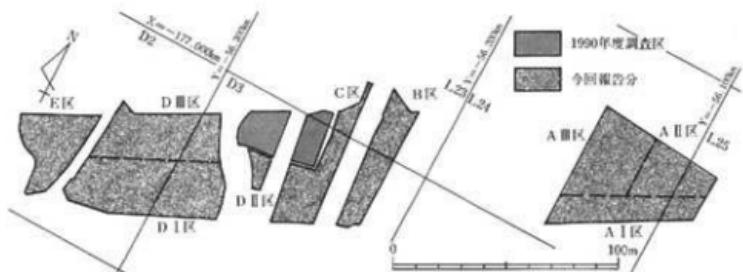
第4図 大阪府地域計画図の図割り

この区画は5桁の英数字で表現され、特に 4×4 mの小区画は遺構の位置表示、遺物取りあげなどの最小単位として利用されている。本調査の大部分は、大C-3-8-D-03-04、大C-3-12-L-24の地区内にある。

掘削は現代工作土については重機で除去した。それ以下の層については層ごとに人力で掘削し、精査して遺構の検出に努めた。

遺構の呼称については、遺構の種類に関わらず通し番号をつけ、番号の末尾に本協会で定めた略号を付した。本報告で使用した遺構の略号の意味は下記の通りである。

OA	道路	OB	建物	OD	堅穴住居	OE	土塁・石塁
OF	柵・堀	OH	炉	OI	水利施設	OO	土坑
OP	柱穴	OR	河川	OS	溝	OT	土器窯・瓦窯
OW	井戸	OY	苑池	OZ	田畠	OC	祭祀
OK	窯	OL	池・沼	OM	貝塚	OG	古墳・墓地
OU	埋葬施設	OX	その他・不明				



第5図 調査区区割図

第4章 調査の成果

第1節 基本層序（第6図 第7図）

三ヶ山西遺跡は近木川右岸の中位段丘上にある。水間鉄道の路線を挟んで、調査区東側（A, B, C, H区）と調査区西側（D, E, F, G区）とでは基盤面構成層が異なる。概して東側は黄灰色系統の粘質土（V層）で、西側は褐色系統の砂質土（VI層）である。

I層（模式図 土層1）

現代の耕作土である。0.2~0.4mの層厚で、赤黒~オリーブ色の砂質土である。A1区ではT.P.+68.2m前後、B~D区ではT.P.+66.0m前後、E区ではT.P.+64.5m前後のレベルを示す。付近は段丘状地形であり、調査区両端で4m近い高低差がある。

II層（模式図 土層2,3）

床土層である。0.2m程度の層厚で、暗褐色~黄褐色の砂質土である。瓦器に混じって近世陶磁器も出土する。A~C区などでは2層以上に細分される。

III層（模式図 土層4）

層厚0.2~0.4mの灰色系の砂質土である。D区以西には存在せず、A~C区にかけて広範囲に広がる。瓦器を含む中世包含層で、水平の堆積層である。鎌倉時代の耕作地造成の際の整地土と推測される。

IV層（模式図 土層5）

5cm程度の層厚の茶褐色砂質土である。後世の削平を受けているためか、D区の東端で部分的に検出されているのみである。

V層（模式図 土層6）

A~C区の地山層で、オリーブ黄~明黄褐色の粘質土である。上面のレベルは、A区ではT.P.+67.70m、B区ではT.P.+65.20m、C区ではT.P.+65.00mを前後する。

VI層（模式図 土層7）

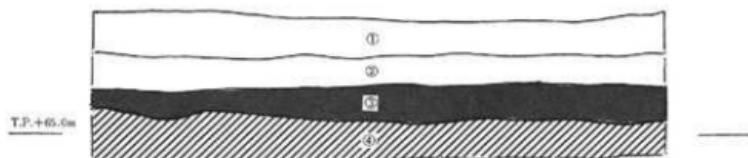
D~E区の地山層で、褐~オリーブ褐色の砂質土である。層厚は0.2~2mである。上面では古墳時代末の竪穴住居群や中世の小溝群が検出されている。

VII層

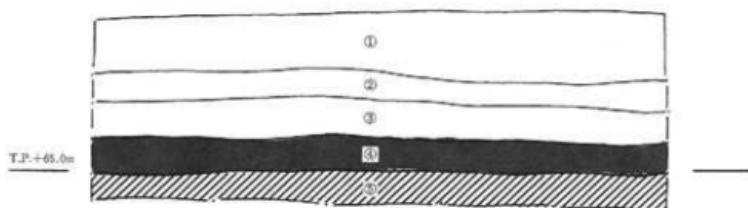
VII層の下にある褐色系統のレキ層で、上面は不整合になっている。レベルはT.P.+63.5~64.6mである。段丘レキ層と推測される。



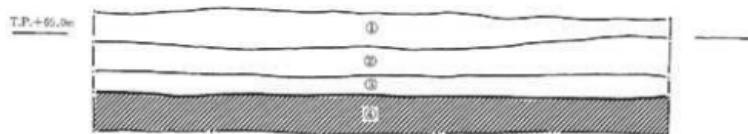
A区土層模式図



B区土層模式図

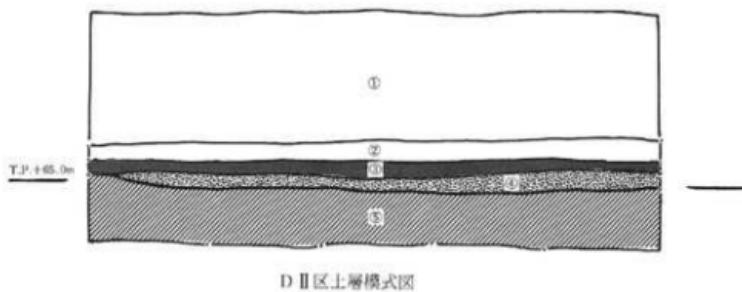


C区土層模式図

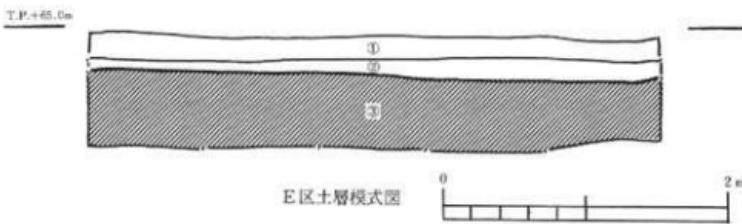


D-I・III区土層模式図

第6図 三ヶ山西遺跡土層模式図(1)



D II区上層模式図



E区土層模式図

A区	B-I, II区
① 10 YR 5/3 に近い黄褐色砂質土 (I層)	① 5 Y 3/2 オリーブ褐色砂質土 (I層)
② 2.5Y 6/2 黄褐色 砂質土 (II層)	② 10 YR 5/4 に近い黄褐色砂質土 (II層)
③ 2.5Y 6/2 深黄色 砂質土 (III層)	③ 2.5Y 5/3 黄褐色 砂質土 (III層)
④ 2.5Y 7/3 淡黄色 砂質土 (IV層)	④ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘質土 (IV層)
⑤ 10 G 6/1 灰灰色 粘質土 (V層)	⑤ 10 YR 6/2 黄褐色 粘質土 (V層)
B区	B-II区
① 10 Y 3/2 オリーブ褐色砂質土 (I層)	① 7.5YR 9/8 黄褐色 砂レキ (底土)
② 2.5Y 5/4 黄褐色 砂質土 (II層)	② 7.5YR 1.7/1 黑色 砂質土 (I層)
③ 10 YR 4/3 に近い黄褐色砂質土 (III層)	③ 10 YR 6/2 明黄色 砂質土 (II層)
④ 5 Y 6/2 オリーブ褐色砂質土 (IV層)	④ 10 YR 3/4 黄褐色 粘質土 (V層)
⑤ 2.5Y 6/2 オリーブ褐色砂質土 (V層)	⑤ 10 YR 4/6 淡色 粘質土 (VI層)
C区	ERX
① 10 YR 3/4 嫩褐色 砂シキ (底土)	① 5 GY 4/1 嫩オリーブ褐色砂質土 (I層)
② 2.5YR 1.7/1 深黑色 砂質土 (II層)	② 5 YR 3/4 嫩赤褐色 砂質土 (II層)
③ 2.5Y 6/6 明黄色 砂質土 (III層)	③ 2.5Y 4/6 オリーブ褐色 砂質土 (IV層)
④ 5 Y 5/1 灰色 砂質土 (V層)	
⑤ 10 YR 6/6 明黄色 砂質土 (V層)	

第7図 三ヶ山西遺跡土層模式図 (2)

第2節 試掘調査の結果（第8図 第9図 第10図）

A, B, F, G, H区を対象としてトレンチを設定した。2×10mを基本として、必要に応じて拡幅、延長した。

各トレンチの状況は、図面に譲ることとし、大まかな概要を示す。

1. 調査区東側は、現況は単純な段丘状地形であるが、旧状は南北方向の埋積谷が入り組んだ複雑な地形であることがわかった。地山層は灰色粘質土（V層）で、埋積谷に挟まれた平坦面上には、鎌倉時代の遺構が広がっている。その上には瓦器を含む包含層（III層）が覆っている。

2. 調査区西側では、不整合の段丘レキ層（VI層）の上に褐色砂質土層（VII層）が堆積しており、褐色砂質土層上に土坑や溝がある。削平を受けているためか、III層は部分的にしか存在しない。

3. 包含層（II III層）中には細片ではあるが、瓦器に混じって、弥生～平安時代の遺物も含まれており、付近に当該時期の遺跡の存在する可能性がある。II層には近世陶磁器が含まれているが、III層は平安末～鎌倉時代初頭の瓦器が主体で、陶磁器は含まれていない。

第3節 III層出土遺物について（第11図）

今回出土した遺物も、1990年度の調査で出土した遺物と同じく、III層から出土したもののが大半である。出土した瓦器は時期的にはII型式後半のものが多い。

III層はA～C区まで広範囲に水平堆積している。また基盤層のV層上面で検出される遺構は不定形の土坑や溝ばかりで、柱穴は検出されていない。水田造成時の整地土と判断される。

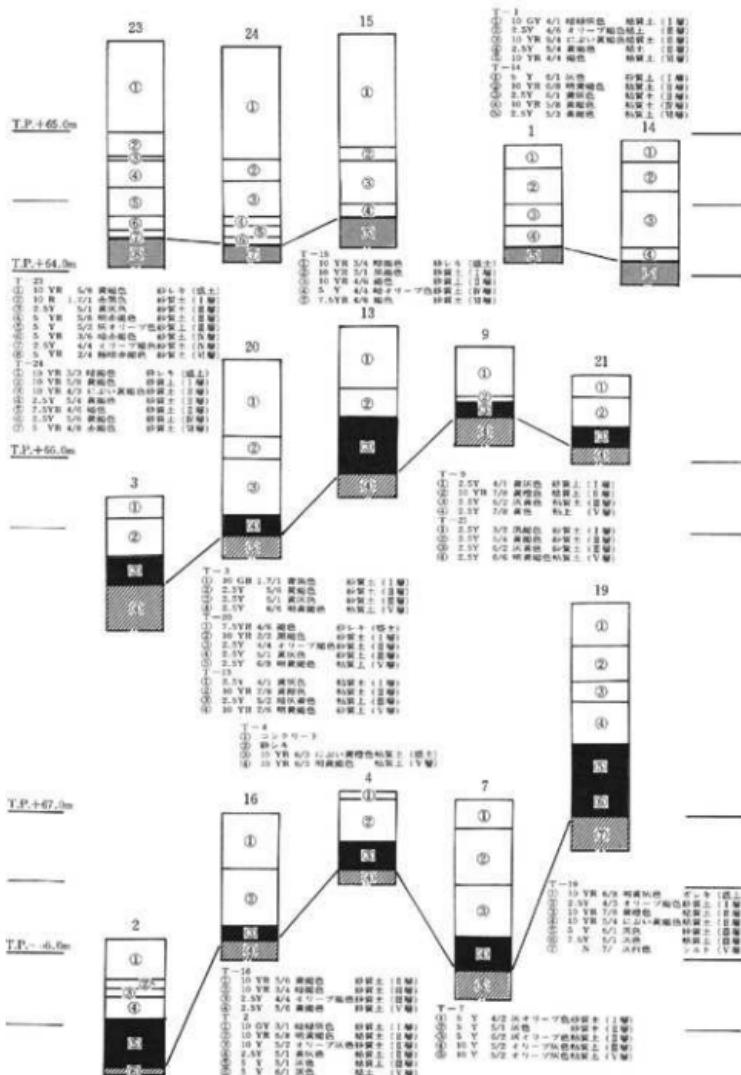
このIII層から出土した遺物を破片毎に分類、集計した。

集計の際の留意点は

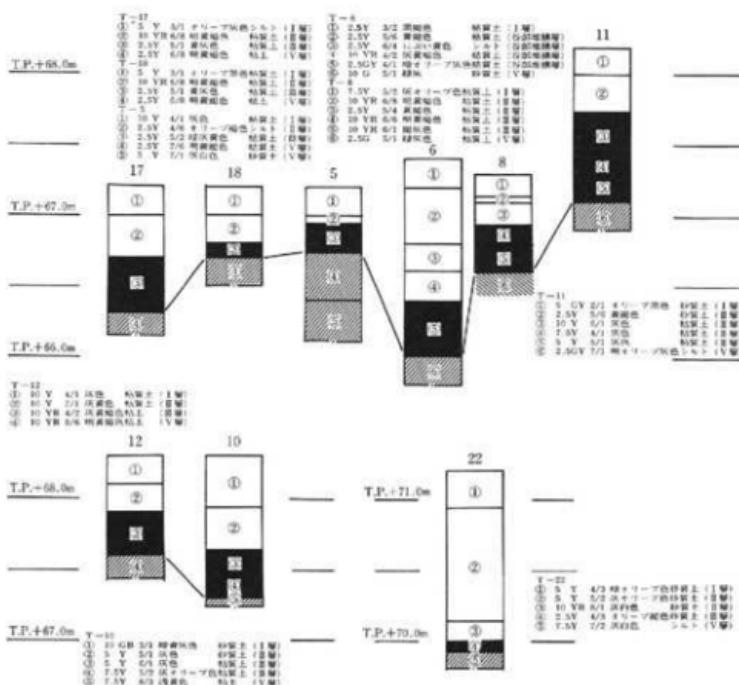
- ①破片数の多い瓦器は椀と皿に分類した。但し、どちらか不明のものも椀として数えた。
- ②黒色土器はA類とB類に分けた。

比率は地区によってバラツキがあるが、数量的に最も多く出土しているのは瓦器である。A区では57%、B、C区では82%にもなる。器種では椀が圧倒的に多く、椀と皿との割合は椀98%に対して皿は2%である。ほとんど椀で占められている。

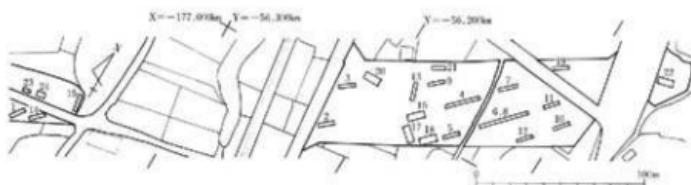
次に多いのは土師質土器である。A区では33%であるが、B C区では10%を越える程度である。小皿が多く、土釜は若干である。



第8図 試掘調査区土層柱状図(1)



第9図 試掘調査区土層柱状図(2)

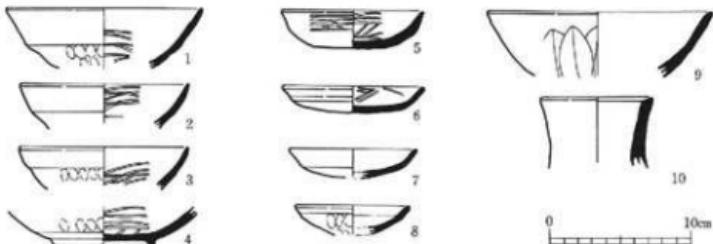


第10図 試掘調査区配置図

また瓦器と土師質土器の比率は、A区では62.9:37.1、B区では88.2:11.8、C区では88.4:11.6で、全体としてはおよそ8:2の割合である。

瓦器と土師質土器以外のものは、わずかに含まれるだけである。

この中で図化できた遺物は第11図の通りである。



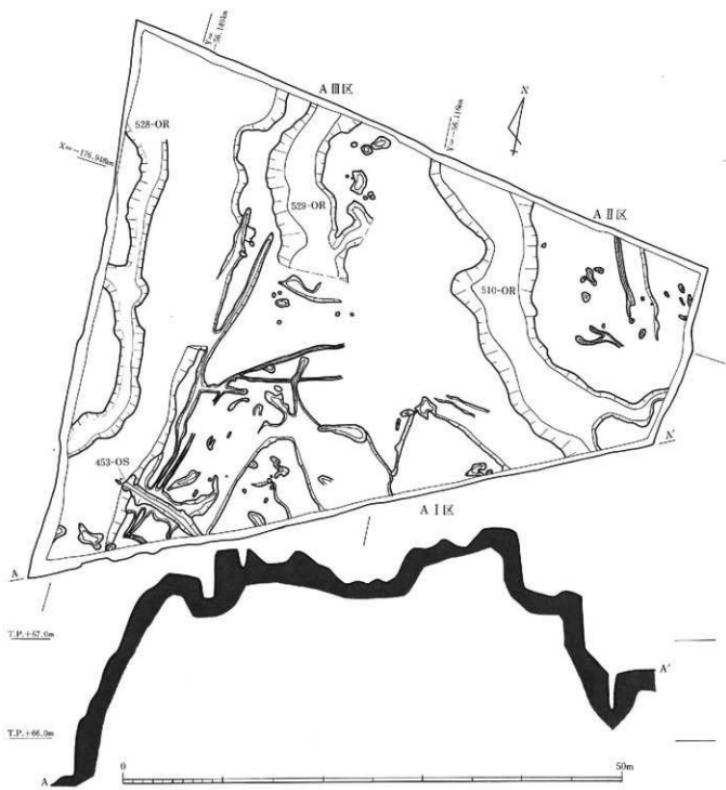
第11図 III層出土遺物

	瓦 器		土 筛 器		黒色土器		須恵器	白 磁	青 磁	計
	瓦器檢	瓦器量	皿	羽釜	A類	B類				
A区	651(56.4%)	11(1.0%)	386(33.8%)	5(0.1%)	10(0.7%)	20(1.8%)	65(5.7%)	2(0.1%)	5(0.4%)	1155
	662(57.4%)		391(33.9%)		30(2.5%)					
B区	693(80.7%)	13(1.5%)	94(11.0%)	1(0.1%)	0(0%)	2(0.2%)	51(6.0%)	2(0.2%)	3(0.3%)	859
	706(82.2%)		95(11.1%)		2(0.2%)					
C区	1190(81.0%)	29(1.9%)	159(10.8%)	1(0.1%)	23(1.6%)	17(1.2%)	49(3.3%)	0(0%)	1(0.1%)	1469
	1219(82.9%)		160(10.9%)		40(2.8%)					
計	2534(72.8%)	53(1.5%)	639(18.3%)	7(0.2%)	33(1.0%)	39(1.1%)	165(4.7%)	4(0.1%)	9(0.3%)	3483
	2587(74.3%)		646(18.5%)		72(2.1%)					

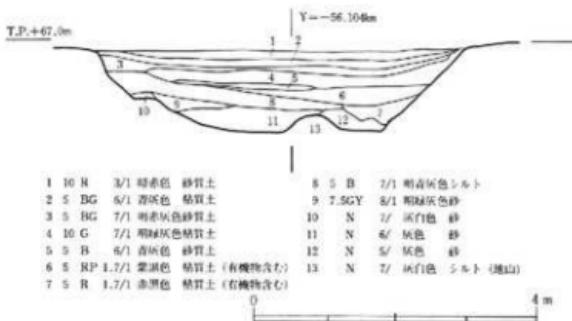
表1 III層出土遺物集計表

第4節 A I ~ III区 (第12図)

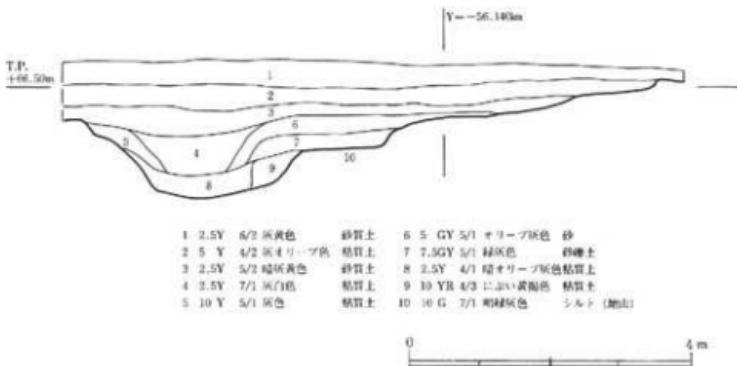
本年度の調査区では最も高位置にあり、調査区内には段丘崖がある。段丘崖の西側は谷状地形で、谷底には自然流路が流れている。調査区東端には南北へ伸びる段丘面と、段丘面を侵食するもう1本の自然流路がある。どちらも南から北へと水が流れているようである。調査区中央の段丘面上には、大きな落ちこみや溝、土坑などの遺構がある。土坑は不定形で浅いものが多く見られる。溝は西側の谷に向かっており、排水に使われた形跡がある。段丘面下層にも自然流路が確認されており、段丘面を何本もの流路が侵食していたようである。



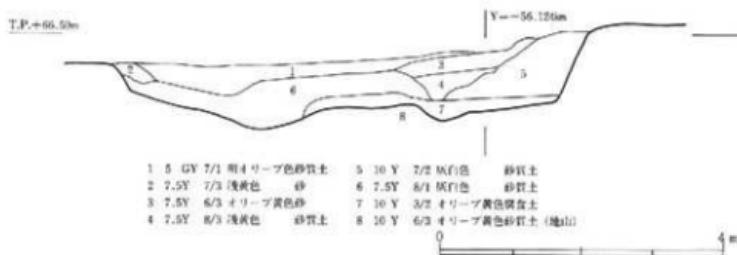
第12図 調査区平面図・断面図（1）A I～III区



第13図 510-OR 土層断面図



第14図 528-OR 土層断面図



第15図 529-OR 土層断面図

層序

I層上面は、段丘面上でT.P.+68.5m、崖下でT.P.+67.6mで、1m程度の比高差がある。II層は褐～灰色砂質土でIII層は灰色砂質土である。I～III層ともに段丘上面から崖下面まで調査区全域にひろがっている。II層には近世遺物が含まれるが、III層は鎌倉時代初頭までの遺物ばかりである。基盤層はV層であるが、段丘面上が灰色系統の粘質土、崖下谷部は明青色シルトで、漸移的な変化が見られる。土坑、溝などの段丘面上の遺構は、V層を基盤にしており、自然流路は3本確認されている。そのうち2本は谷底と段丘面上を侵食しており、528-O Rは段丘崖の谷底で3層下の谷部堆積層直下から検出されている。残りの1本はV層の下にあって、明らかに1時期古いものである。段丘を侵食するように何本もの流路があって、土砂の堆積で流れを変えた結果と推測される。基盤層での比高差は、谷底でT.P.+65.0m、段丘面上でT.P.+67.5～67.8mと3m以上にもなる。

西側谷部ではIII層の下に無遺物の堆積層がある。III層が中世の耕作土で、溝などの遺構を耕作の結果生じたものとすると、少なくとも鎌倉時代前半の開発時にはこの流路は埋没していたことになる。

遺構

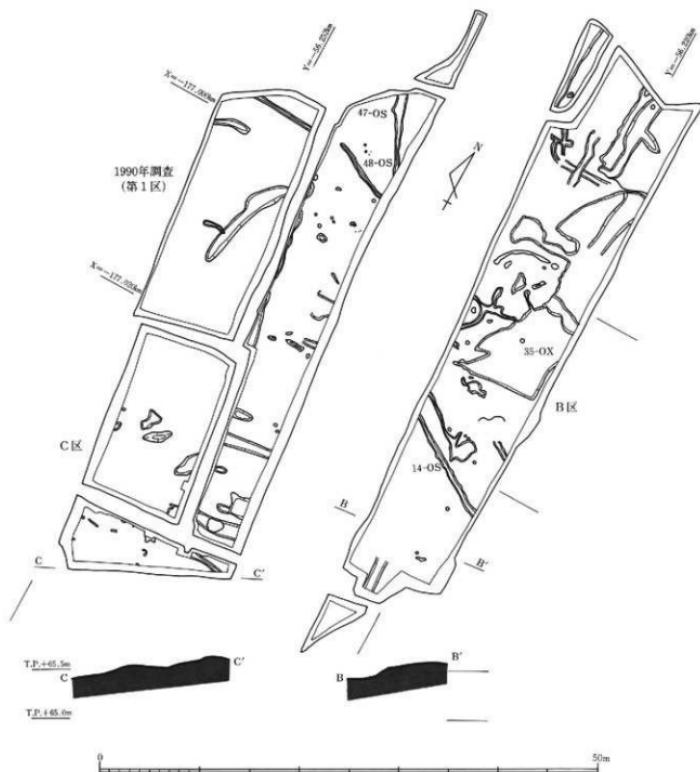
遺構は全てIII層の直下から検出されている。明確な柱穴ではなく、不定形の土坑や溝、自然流路がほとんどである。これらの遺構は耕作に伴う、畠溝や区画溝の類で、III層は耕作上になるものと思われる。

510-O R (第13図)

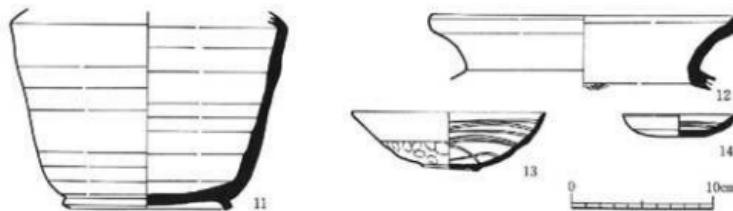
L24-J X～N Yにかけてのびる大溝である。瓦器を含む中世包含層の下から検出されている。上位の丘陵から流れ落ちて来る水を集めるように、南から北に流れる。幅は5.5～11mで、深さは1～1.4mである。埋土は暗灰色系統の粘質土と灰色系統砂質土の互層で、如実に水流の痕跡を示す。堆積層の中層には、有機質を含んだ赤黒～紫黒色の粘質土がある。流路の途中に水流の攻撃面が、大きくえぐられるようにしてあり、付近の出水の激しさを思わせる。

528-O R (第14図)

調査区西側の段丘谷にある流路で、南北方向に流れている。幅は4m～5.5m、深さは1m～1.2mである。埋土には黒～灰の粘質土や砂質土が混じっている。概して流路の中層部は有機物を多く含む黒～暗オリーブ灰色粘質土で、流路の両脇には灰～褐色系統の砂質土や、粘質土が堆積している。流木が多くふくまれているが、全て自然木で加工痕や切



第16図 調査区平面図・断面図(2) B, C区



第17図 528-OR直上出土土器

断痕のあるものはない。510-ORと併存する可能性がある。

なおこの流路の直上にあるIII層下の谷部堆積層から第17図のような土器が出土している。528-OS埋没後の様相を示すものであろう。

529-OR (第15図)

第V層の下層にある流路で、幅6.8m以上、深さ1.3~1.7mである。埋土は灰~青灰色の砂および砂質土が主体で、底部には灰色系統の粘質土や腐食土層が堆積している。堆積土中の砂の粒子は、細かいもの粗いもの、粘土と混じるものなどいろいろで、水流によって堆積したことを物語っている。この流路の埋没後、V層が形成され、鎌倉期の遺構が形成されたようである。

453-OS

調査区西端にある溝で、幅1.5~1.0m、深さ0.7~0.8mである。オリーブ黄~黄褐色粘質土を埋土とする。西側谷528-ORに向けて口を開いており、この溝に直行するように、数本の小さな溝が取り付いている。排水溝であろう。

531-OS

L24-P T ~ P Uにかけての溝である。深さは50cm、幅60~120cmで埋土は黄褐色砂質土である。断面はU字形である。

第5節 B,C区 (第16図)

水間鉄道の東側、府道岸和田牛滝山貝塚線を間に挟む両側の調査区である。B、C区ともに現状は田で、現状地盤はほぼ同じレベルである。進入路切り替えの必要から、B区は2回に分けて調査した。

層序

I層上面は、B区でT.P.+66.0m、C区でT.P.+66.5m前後を示す。II層の下にはII

層、III層そして地山層であるV層が続く。II層からは瓦器にまじって近世陶磁器が出土、III層からはI～II型式を中心とした瓦器が出土している。II・III層とも極めて均質な砂質土で、上面のレベルはほぼ一定、水平な堆積である。III層は鎌倉時代初期、II層は近世になってからの、耕作地開発の整地層の可能性がある。

遺構

この調査区で検出されているのは、溝と不定形の落ち込み状遺構がほとんどである。

(中世)

14-O S

D 3-E S～F Uにかけて伸びる小溝である。幅0.6～0.7m、深さ0.25～0.3m、検出長は12mである。断面はU字形の素掘りの溝で、暗灰色砂質土を埋土とする。

47-O S

D 3-W O～Y Oにかけて伸びる小溝である。幅0.5～1.5m、深さ0.2m、検出長8mである。素掘りの溝で、褐～灰色の粘質系の土を埋土とする。

48-O S

D 3-Y N～Y Pにかけて伸びる小溝である。幅0.3～0.5m、深さ0.1m、検出長6.5mである。素掘りの溝で、オリーブ色粘質土を埋土とする。

35-O X

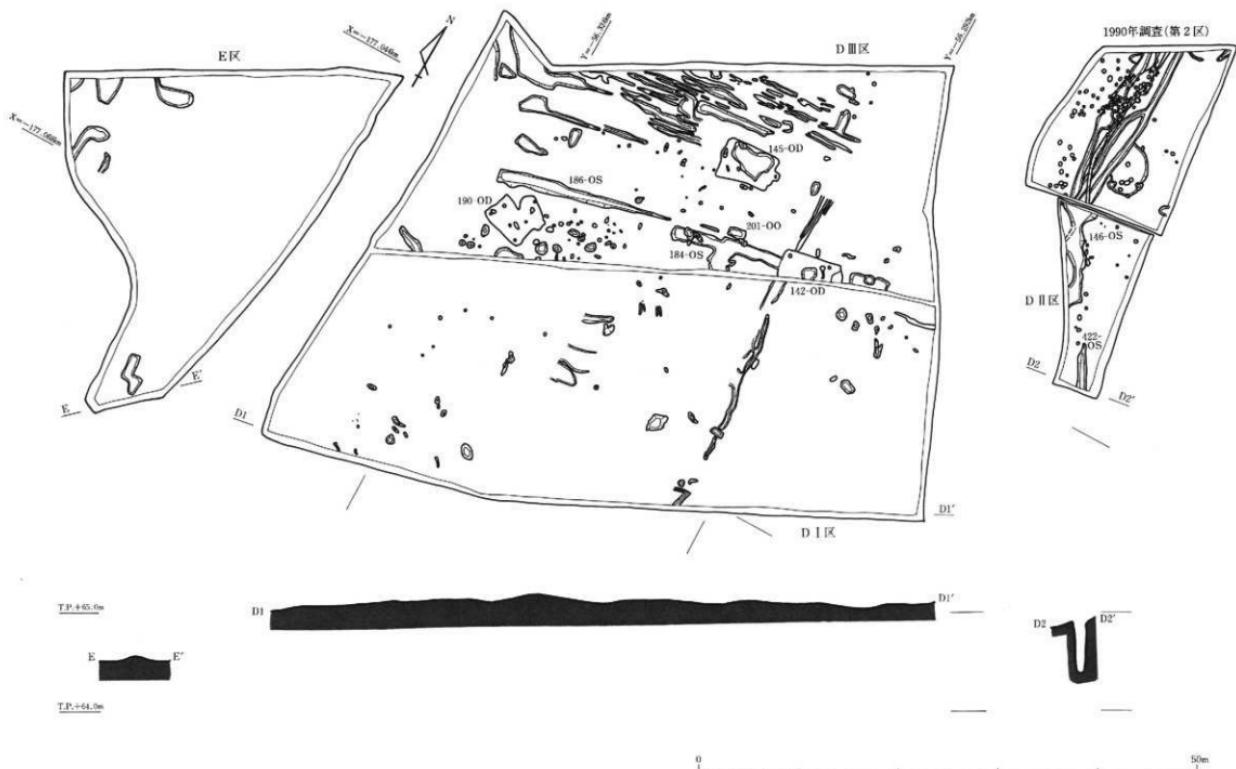
D 3-A U～C Tにかけてある不定形の落ち込みである。深さは0.1～0.15mで、暗灰黄色粘質土を埋土とする。

第6節 D I～III区（第18図）

土置き場確保の事情からD I・III区及びD II区に分割して調査した。

層序

D I・III区とD II区で層序は多少異なっている。I層は両区とも共通している。D I・III区ではII層は認められるがIII層は認められない。D II区ではII層は認められないがIII層は認められ、さらにその下にはIV層が確認される。このIV層からは遺物が出土していないので時期は不明だが、中世を通る可能性がある。地山層はI～III区とも共通のVI層で、オリーブ褐～褐色の砂質土である。地山面は平坦であるが、南側が若干高くなっている。II～IV層の土層の異動については、後世の削平が原因と推測される。

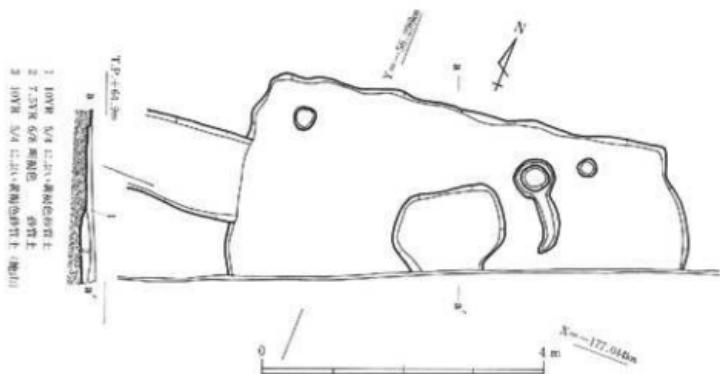


第18図 調査区平面図・断面図(3) D I ~ III, E区

遺構

遺構については、南半部は削平のため殆ど残っていない。北側は傾斜の加減で低くなってしまっており、3棟の竪穴式住居、ピット、土坑及び東西方向の溝などが検出された。

3棟の竪穴式住居からは遺物は出土していないが、概ね6世紀末から7世紀初頭のものと推測される。東西方向の溝群には瓦器が含まれている。



第19図 142-O D 平面・断面図

(古墳時代)

竪穴住居跡

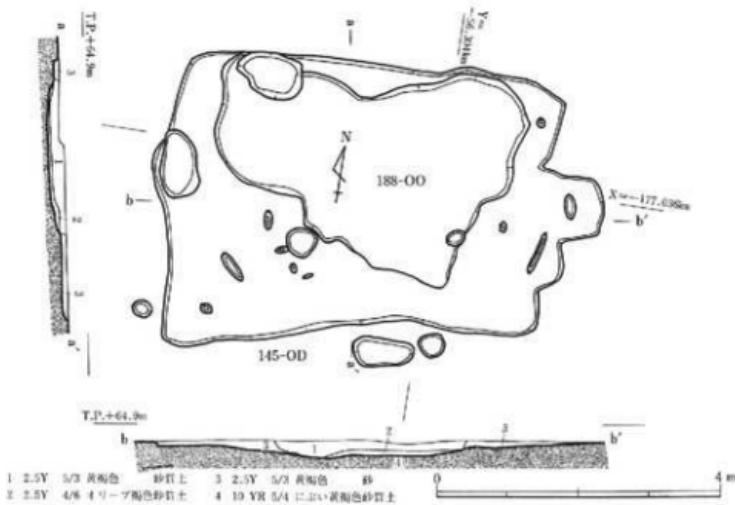
142-O D (第19図)

この住居跡は調査区の北東部D 3 - K D地区を中心に位置する。黒褐色砂質土層をベースに構築されている。削平により北側部分しか残っていないが、平面形は方形で、東西約5.5mである。東側に高床部があり、柱穴は三ヶ所で確認している。中央には土坑がある。土坑には焼け土が伴っていないので、貯蔵穴と推測される。

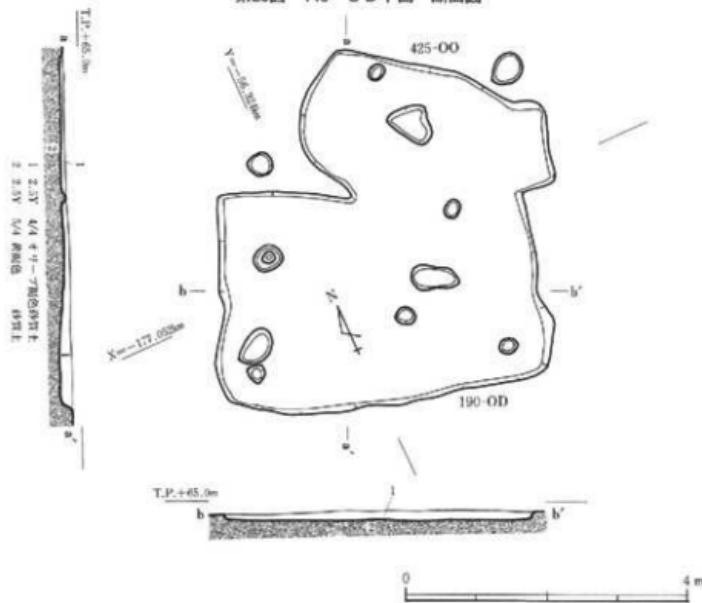
床面のレベルはT.P. + 64.6mで、床から検出面までの高さは0.2mである。壁面はやや傾斜しており、壁溝はなかった。

145-O D (第20図)

この住居跡は調査区の北部D 2 - J X地区を中心に位置する。暗褐色砂質土をベースに構築されている。平面は長方形で、東西は5.3m、南北は3.5~4mである。中央の土坑188-O Oは上からの掘り込みで、瓦器を含んでいる。西周壁の内側と、南周壁の外側には



第20図 145-OD 平面・断面図



第21図 190-OD 平面・断面図

熱で赤化した土坑があり、それ以外に床面にもいくつか小土坑がある。

床面のレベルはT.P. +64.6mで、床から検出面までの高さは0.1~0.2mである。壁面は直立しており、壁溝は検出されなかった。

190-O D (第21図)

この住居跡は調査区西側D 2 - N Tを中心にある。暗褐色砂質土をベースに構築されている。平面は長方形で、東西は約4.5m、南北は約3mである。小土坑が2基検出された。北東隅を他の上坑によって切られている。4本柱の長方形の上屋が考えられる。床面のレベルはT.P. +64.8~64.7mで、床から検出面までの高さは0.1~0.2mである。壁面は傾斜しており、壁溝は検出されなかった。

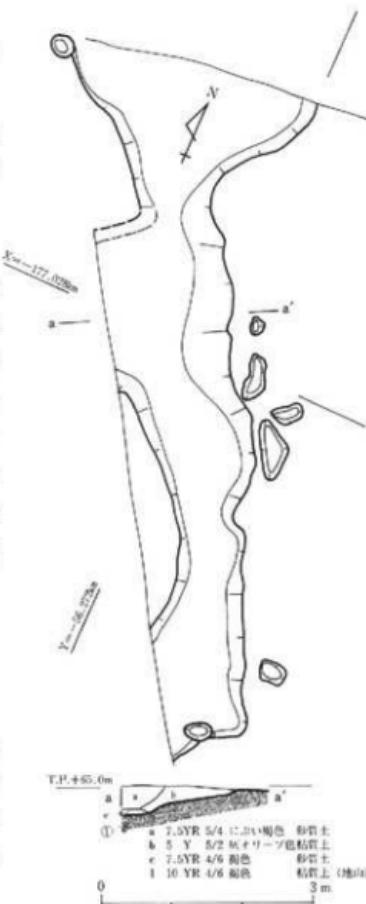
201-O O

調査区中央部D 2 - K Yに位置している。平面は長方形で東西は1.7m、短辺は0.8m、深さは35cmですり鉢状の底部である。埋土は2層に分かれる。上層は炭を含む黄褐色砂質土で、下層は赤褐色砂質土で熱で赤化した痕跡がある。時期は不明であるが、住居跡関連の屋外炉の可能性もある。

溝

146-O S (第22図)

D 3 - G G ~ I H にある南北方向の溝状遺構である。褐~灰色系砂質土を埋土とする。VI層を基盤としており幅1~3.5m、幅0.5mである。422-O Sと同じで、D区西側で検出されている中世の小溝群とは、方位も異なる。遺物は検出していないが、土色などから判断しても竪穴住居と同時期の可能性がある。



第22図 146-O S 平面・断面図

(中世)

184. 186—O S

D 2—L S～D 3—L Aにある溝状遺構。幅1～1.2mで、深さは0.1～0.2mである。オリーブ褐色砂質土を埋土とする。V層を基盤として掘り込まれており、埋土中には瓦器を含む。溝状遺構としては、調査区北側にある小溝群の南にある。D区で検出された溝の中では最もしっかりしており、耕作地の境界溝と推測される。

422—O S

D 3—J Iで検出した溝。南北方向で検出長4.5m、幅0.3～0.4mである。褐色系砂質土を埋土とする。遺物は発見していない。

小溝群

幅0.5～1m程度の東西方向の溝群で、0.3m程度の深さである。大きさはバラバラであるが方向はそろっている。中でも比較的しっかりした溝を見ると、1m程度の間隔で並んでいる様にも見える。耕作土の上から掘られた畠溝であろうか。遺物は瓦器の細片が若干含まれる程度で極めて少ない。II型式後半のものが多いようである。

第7節 E区

この地区は大きく削平されているのか、時期不明の不定形の土坑が若干検出されただけである。

層序

この調査区は基本的に削平が激しく、土層も残りは良くない。I層の下にはII層があり、II層には瓦器が含まれているが、削られた後の2次堆積のようである。II層の下はV層でD区と同様に遺構形成面と思われるが、削平のためか遺構は認められない。

第5章 まとめ

今回の調査では、段丘上面（A～C区）で中世の遺構群を、下面（D区）では古墳時代末から中世にかけての遺構群を検出した。現況は単純な段丘地形であるが、旧状は間に谷が入り込んでいたりして複雑であることが判明した。

また中世の遺構は溝や落ち込みばかりであるが、古墳時代のものとしては竪穴式住居も見つかっている。下部は古くからの開発の拠点で、上は中世になって開発されたものと思われる。

（縄文－古墳時代前期）

明確な文化層は確認されなかったが、I～III層中に弥生土器や土師器の細片が認められる。いずれも小破片が少数出土だけで、時期的にはバラバラで継続しない。近辺で散発的小規模な開発が何回かあったのであろう。

（古墳時代）

D区で竪穴式住居および柱穴群が検出されている。平成2年度の調査区とA II区では掘立柱建物ばかりが検出されており、竪穴式住居が検出されたのはA III区のみである。

竪穴式住居は、142-O.D.、145-O.D.、190-O.D.の3棟で、いずれも方形で1片5m程度の大きさである。壁溝、カマドではなく、柱穴も極めて小さなものである。柱はピットで地中にしっかりと固定したものではなく、床に軽く置く程度の簡易なものだったと推測される。

掘立柱建物は平成2年度の調査で確認されている。今までに復元されたのは2棟で、2間×2間のものと、1間×3間のものがある。この柱穴からは6世紀末～7世紀初頭の須恵器が発見されている。竪穴式住居内からは遺物は出土していないが、掘立柱建物と遺構内埋上が同質なことから同時期の可能性がある。

当遺跡で検出された古墳時代の集落はこの時期だけで廃絶し、次の時代には継続しない。小規模な集落だったのだろう。

付近の遺跡をみると、石才南遺跡では当遺跡に先行する6世紀前半代の掘立柱建物群が発見されている。また畠中遺跡では6世紀前半代だけで終了する竪穴式住居が6棟検索されており、そのうち3棟が1組で検出されている。当遺跡に先行するものである。

(平安末～鎌倉)

この時期の遺構は調査区全域で発見されている。全体的に遺構からの遺物の出土は少ない。割合としてはI～II型式（尾上編年）の瓦器が多く、平安時代末～鎌倉時代初期と推測される。A～C区で検出された遺構とD区で検出された遺構とでは、様相に差がある。だがどちらも柱穴や建物跡は発見されておらず、耕作地だったものと推測される。

● A～C区

A区で発見された自然流路と不定形土坑、方向の一定しない溝群などがこの時代の主要な遺構である。基盤面構成層のV層は粘土質で水の抜けにくい層である。段丘面のV層上にはIII層が堆積しており、遺構内出土遺物も12世紀～13世紀初頭という年代を示している。遺構には明確な柱穴がなく、中世の住居跡は発見されなかった。III層は中世の耕作土だった可能性が大きく、V層上の遺構は耕作に関する排水などの施設だったと思われる。事実、A区で検出された遺構はトレーナー南西の段丘崖そばに多くかたまっており、耕作地の境界を示す区画溝だった可能性がある。また段丘崖下では、流路528～O Rの埋土は明らかに水中堆積で、その直上にはIII層との間に別の谷部堆積層がある。この層は若干の瓦器を含む均質な堆積土で、水流による堆積とは考えられない。中世初期の埋め立て土と思われる。流路510～O R、528～O Rの成立時期や埋没時期については詳しいことはわからぬが、鎌倉時代初頭を測ることは確実である。

● D区

北半部で東西方向の小溝群が発見されている。畠の区画溝と推測される186～O Sを最南に配して、幾条もの小溝が走る。後世の削平のためかIII層は残っていない。この調査区はA～C区とは違い基盤面はレキ層～砂質土（VI層）で、水ハケはいい。A～C区の水田に対して、畠だったものと推測される。

III層はA～C区まで広範に分布している。III層がD区以西で確認されなかったのは、後世の削平による可能性がある。整地の作業を考えると、耕作土であるIII層の整地だけでもかなりの作業であるが、この時期の開発はこれだけに留まらない。谷部の埋め立てまで伴う大規模なものである。鎌倉時代初頭の開発の痕跡は、当遺跡北方に所在する森B遺跡でも確認されている。これらのことからすると、鎌倉時代初頭には木鳥谷奥部まで農地開発が進行していたようである。

文献によると、宝治二（1248）年十二月の関東下知状（久米田寺文書）には、「木島新庄」「木島郷被庄号」とあり、この頃には木島莊が立莊していたことが判明する。成立にあたっては木島郷内にあった久米田寺の免田三町余が収公され、北条得宗領として立莊されたようである。今回検出した遺構群は時期的には、木島莊立莊の時期に先行する。遺跡地内で広範にみられる中世初期の整地上は、この時期に大きな開発があったことを示している。木島莊立莊直前の莊園開発の実態を示すものであろう。

また中世包含層中には微細ながら黒色土器A類やB類も含まれている。遺構としては確認されなかったものの、平安時代の古い時期から開拓谷の水流を利用した小規模な開発があったものと考えられる。

（中世後期）

明確な遺構は確認されていない。しかしII層中には微細ながら、終末期に近い瓦器や15世紀代の瓦質羽釜なども含まれている。この時期にも活動があったことが推測される。

（近世）

現代も耕作地の床土として利用されているII層の形成された時期である。II層はA～D区まで調査区全域で発見されている。II層中には中世の瓦器に混じって、18世紀頃の磁器なども含まれている。近世中期には三ツ松一帯で耕地の再開発があり、現代に近い農村の景観ができたものと思われる。

（自然流路と現代の水路について）

調査区内には3本の大きな流路が確認されている。A区で検出されている510.528.529-ORの3本である。これを層位との関係から整理すると

①510-ORと528-ORの2本はV層を基盤面としている。528-ORは段丘崖に形成された谷状地形の底部にあり、529-ORは段丘平面部を横切って流下している。その上には谷の堆積土とIII層が堆積している。この2本は層位的には、同時期に存在したとしても矛盾しない。

②さらに529-ORについては、段丘平面上でV層下より検出されており、V層を基盤とする510.528-ORよりも古く遡る。510-ORの前身と推測される。

以上の3本はIII層の下位で、III層が形成された頃には完全に埋没している。この流路が

埋没した後には、水の流れはどうなったのであろうか。中世初期に成立した耕作地にはどのようにして水を供給したのだろうか。土砂の堆積によって流路は変化するので、耕作上の整地後に新たに人工的に流路を設置して対応したのだろう。現在A区内を2本の水路が横切っている。以下、この発掘調査で検出された流路と、現在の用水路、そして自然地形との関係について考えたい。

現在の2本の用水路を逆にたどっていくと、途中で合流して1本になって水間寺の門前まで行き着く。地点は近木川の右岸薺原川との合流点から百m程度上流である。三ヶ山丘陵から流れて来た水が近木川に落下するところで問題の水路に取り込まれている。起点からは薺原川の合流点まで川沿いに進んで、合流点からは川から離れるように北へと方向を変える。数百mの地点で主要地方道岸和田牛滝山貝塚線を越えて、道路の東側へ出る。道路を越えたところで水路は2本に分かれ（水路A、水路Bとする）、平行しながら三ヶ山西遺跡へ至る。水路Aはそのまま北へ向かうが、水路Bは調査区を越えたところで再び水路Aと合流して1本になる。このことからも水路Aが幹線であることがわかる。

さて調査区内では、水路AはA区西端をかすめ、水路BはA区南東隅から北西隅へと調査区をナナメに横切る。位置からすると段丘下を通る水路Aは528-O Rと、段丘上にあ



第23図 A区と関係用水路 (S = 1/8000)

る水路Bは510-O Rと対応する。

発掘調査の結果から、528-O Sは段丘崖の開析谷の底を通る流路であることがわかっている。現在の用水路も段丘崖に沿って走っており、528. 510-O Rの遺制と理解できる。

実際に、現在の用水路に沿って歩いてみると、この水路の周辺には府道岸和田牛滝山貝塚線が走って、宅地化も進行しており、地形はかなり改変されている。しかし調査区以外の地点でも水路の両側で明確に数十cm～1m程度の比高差の認められるところが何カ所かある。この段差は埋没しかかった段丘崖の谷の痕跡であることは明らかである。現在の用水路も、528-O Sを踏襲して段丘崖線に沿って敷設されたのであろう。

以上のことから開発史を整理すると、平安時代に段丘崖の開析谷を利用して極所的な開発が始まり、鎌倉時代初頭以降、本格的な耕地開発に伴って人工的な水路による水利に転換していく様子がうかがえる。明治十八年陸地測量部作成の地図をみても、現在の水路とほぼ同じ走行で用水路が走っているのが確認できる。



第24図 三ヶ山西遺跡周辺地形図

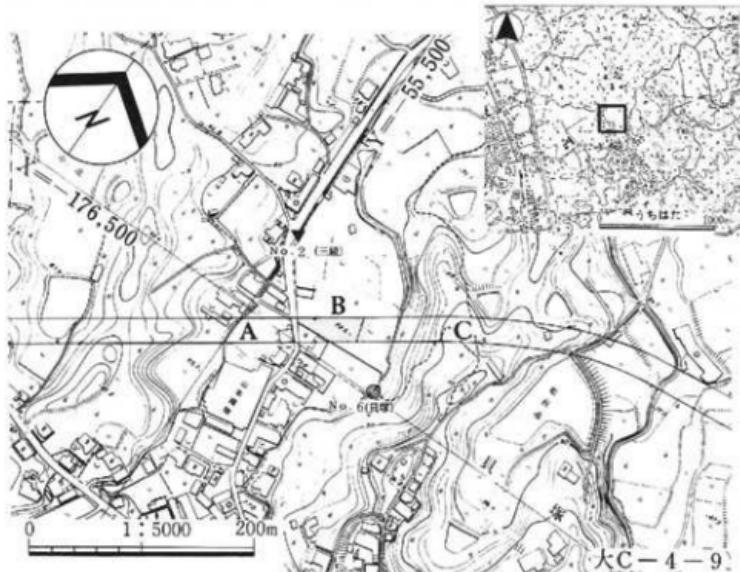
附載 三ヶ山遺跡試掘調査報告

1、調査に至る経過と目的

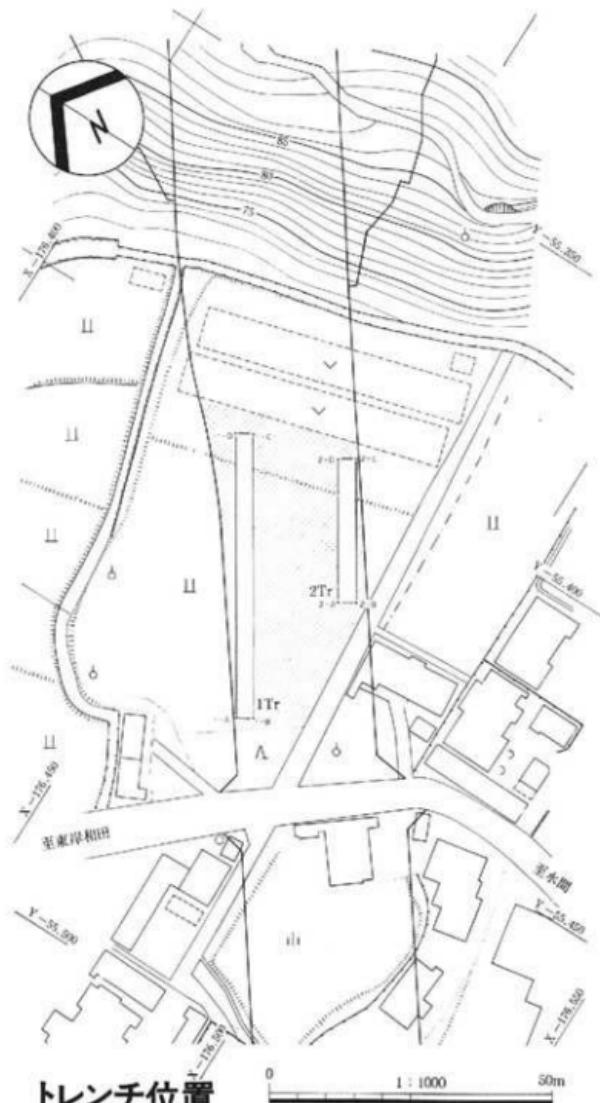
三ヶ山遺跡は、貝塚市三ヶ山地内に所在する。（財）大阪文化財センターが1973年度に実施した埋蔵文化財分布調査により周知の遺跡としてマークされていたものである。

調査は、主要地方道泉佐野河内長野線（大阪外環状線）建設に伴って計画され、大阪府教育委員会文化財保護課の指示で大阪府土木部岸和田工事事務所との間に委託契約を交わし、財団法人大阪府埋蔵文化財協会（担当：調査課4班〈班長藤澤真依〉技師田中一廣）が実施した。1993年1月22日より準備工に着手、2月19日に総ての作業を終了した。尚、掘削工事は㈱カンサイ、基準点測量は㈱関西航測が実施した。

今回の調査は、三ヶ山西遺跡以東の周知の遺跡部分をも含んだ周辺部、3箇所：幅員約40~20m・総延長約1060m（仮称A~C地区・対象面積9600m²）の試掘調査を延べ15日で



第25図 三ヶ山遺跡位置図 (S=1/50000, 1/5000)



第26図 調査地とトレンチ位置図 (S=1/1000)

実施するというものであった。現地調査着手段階になっても地権者との条件整備が全く実施されておらず、調査対象範囲を縮小して実施する事になった。

結果、B地区道路用地の植木畑地・入家敷地を除外した、水田一筆とビニールハウス畑地の一部が対象である。トレンチは、地形を考慮し、路線敷に平行させて、幅員3m・長短2本を設定した。現地調査は2月1日から12日まで実施した。よって、調査対象範囲は約1300m²（調査面積225m²・トレンチ延べ長75m・掘削土量177m³）であった。

調査の目的は、遺跡の有無を確認することと周知の遺跡内の遺構の広がりを把握する事であり、層位

毎に掘削を繰り返し、断ち割りで土層の把握・広がりに注意をはらった。また、基準点の埋標でも路線を考慮して選点を実施した。

2、調査の結果

1トレンチ：路線に沿った南北方向に3m×50mを設定。1層は40~25cmの耕作土層。畑地側は耕土が厚い。1b層は灰色砂質土の元耕作土層。1c層は水田部で見られる10~5cmの層厚の元土床で黄橙色粘質シルト層である。2層は旧水田層で西部10mに認められる。畦畔の境目が確認でき、旧水田地割にあたる。2a層、10cmの黄色粘土の混じる明灰色粘質シルト層。2b層は鉄分を含んだ黄橙色粘土層で床土にあたる。2b層上面で畝溝が数條確認できる。時期的には近世後期以後と推定できる。3層として、谷部の自然堆積土の灰色粘質土(3a層20cm)・細砂混じり明灰色粘土(3b層30~25cm)、3c層の青灰色粘土層が認められる。4層として地山層の茶褐色粗砂層・橙色シマ混じり灰色微砂層や灰色粗砂層が続く。畑地部分の地山は1層直下に橙色粘土・灰白色粘土がシマ状に斜めに認められ、丘陵部の土層となる。トレンチ中央部での地山層の灰色粘土ブロック堆積は、



第27図 トレンチ土層断面図 (S = 縦1/60・横1/600)

地殻変動時の丘陵土砂崩れによる堆積かと判断される。地山層の断ち割りはG.L.-1.0mまで掘削。地山面は、T.P.+72.4~72.0mを測った。

検出遺構は、1層より掘り込まれた水田暗渠3条と耕作ビット・耕作土坑（水溜か）を確認したのみであった。遺物は、2a層及び地山直上層より礫摺鉢・土師器6・近世近代の染付け2の微細片が出土した。

2トレンチ：1T r. に平行して3m×25mのサブトレンチを設定。1層耕土25~15cm。水田部で1b層として、灰色砂質土の元耕土を認める。1層の床土として黄灰色粘質土（1c層）が10~5cm認められる。その下層は1T r. 同様、緑黄色微砂質粘土・青灰色粘土・淡灰色粘土・橙色微砂混じりの灰色シルト・灰色微砂混じり淡灰色粘土・鉄分を含んだ灰白色微砂質粘土・灰色微砂質粘土・橙色粘土が、地山層を形成する。土層は地殻変動時に形成された斜めなどの不整合堆積を示す。尚、畠地部で土砂崩れの堆積が約10m観察された。堆積土は、地山上の灰色ブロック混じり淡灰色土・微細砂混じり淡灰色粘土・灰黄色粘質土で、堅い青灰色微砂質粘土層・白灰色粘土層の直上に形成されている。地山面の高さは、T.P.+72.3~72.1mであった。

遺構としては、地山面で1層から掘り込まれた暗渠1条が検出されたのみである。その他に北隅で谷地形の落ちを確認した。堆積土は、灰黄色微砂質粘土・灰白色細砂・赤褐色細砂層である。何等遺物は出土しない。トレンチ内でも遺物は一切確認されなかった。

3、まとめ

三ヶ山遺跡内では、近世後期以後近現代（18世紀から20世紀）の水田耕作の痕跡と地山の類似する自然地形の状況が確認できるものの、近世以前の集落跡などに伴う遺構・遺物等は、確認されなかった。

丘陵に挟まれた三ヶ山谷の谷地形はこの付近ではかなり狭くなっているが、古い時期にはさらに狭くA・B地区境界付近からA地区の丘陵縁辺部までが谷地形にあたると考えられ、谷の奥まった丘陵斜面に三ヶ山の現集落が展開していることになろう。

〈三ヶ山三級基準点成果〉

鉛No.	X座標	Y座標	H高さ
No.1	-176 722.342	-55 800.438	86.416
No.2	-176 422.355	-55 498.662	72.137

〈田中一廣19930301稿〉

図 版



A I 区全景（西から）



A II 区全景（西から）



A II区 510—O R (南から)



A II区 510—O R断面



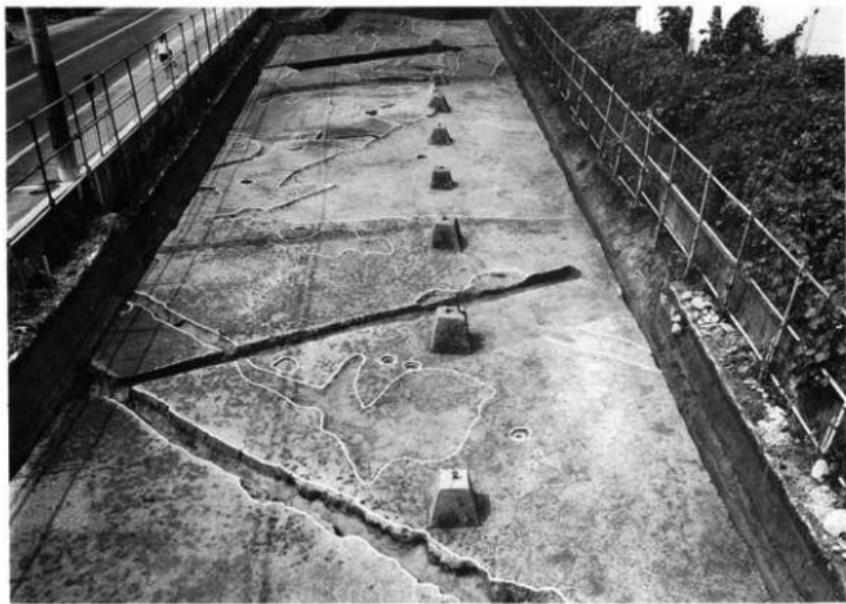
A III区全景（南から）



A III区北壁断面



B区全景（南から）



B区南側（南から）



B 区北側（南から）



B 区西壁断面



C 区全景（北から）



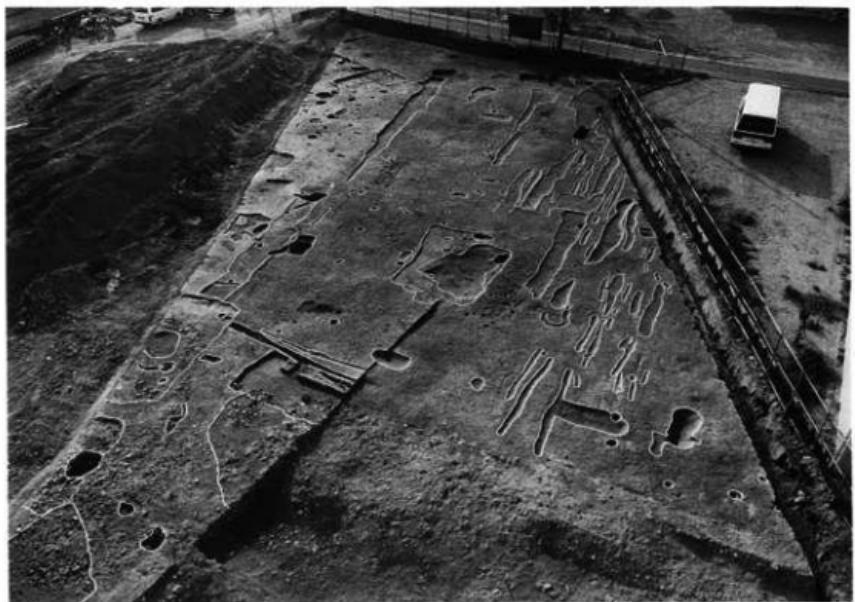
C 区北側（北から）



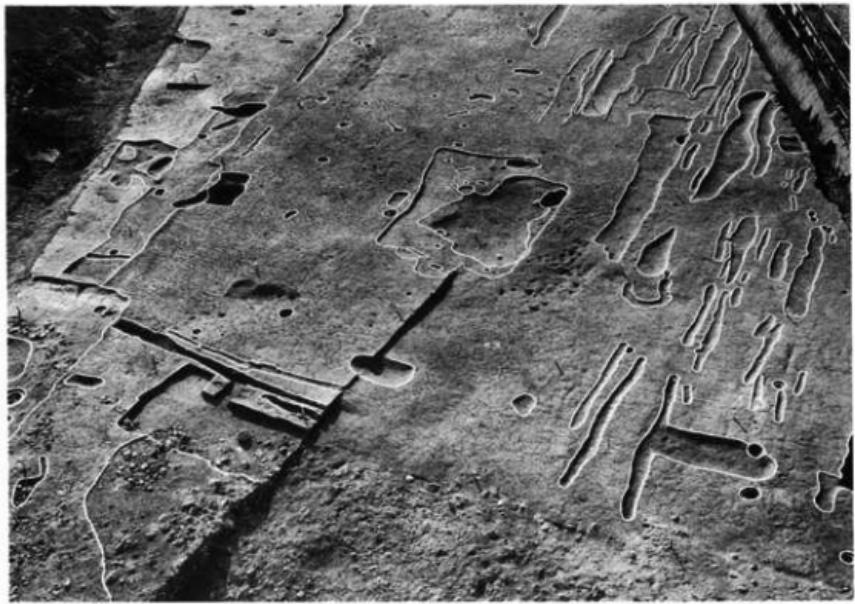
D II区全景（北から）



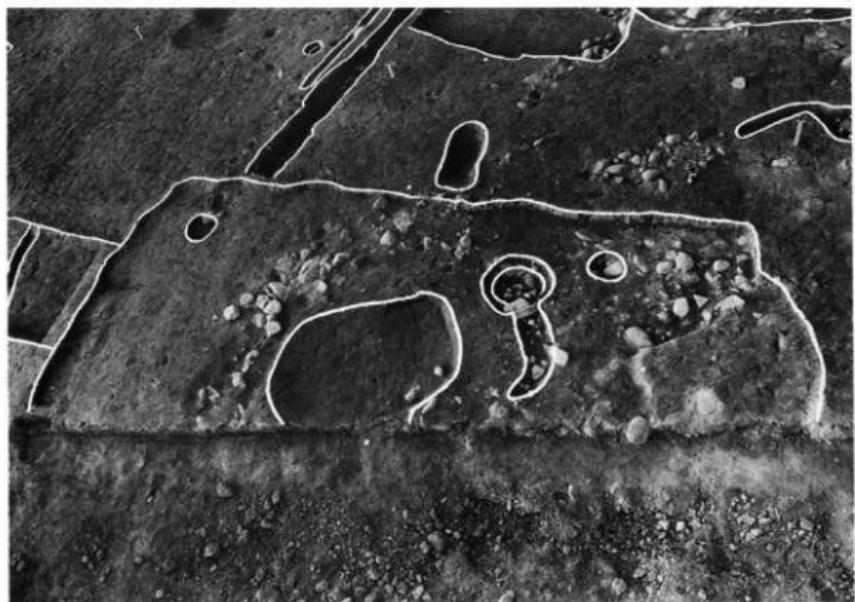
D II区 146-O S（北から）



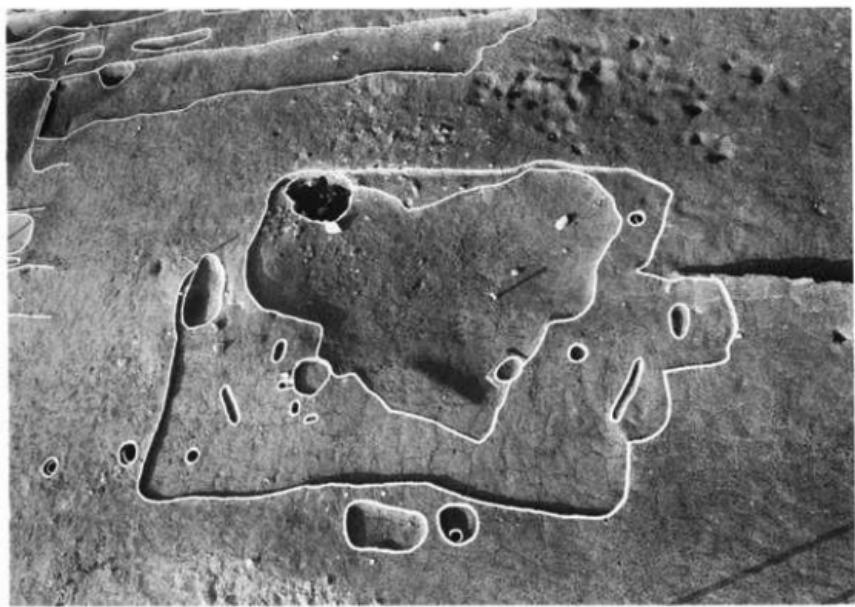
D III区全景（東から）



D III区東側（東から）



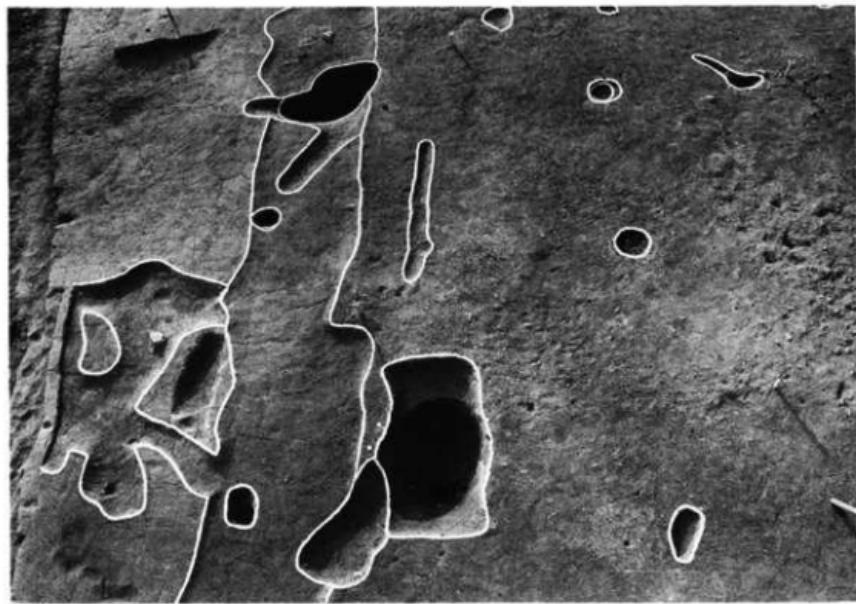
D III区 142—O.D. (南から)



D III区 145—O.D. (南から)



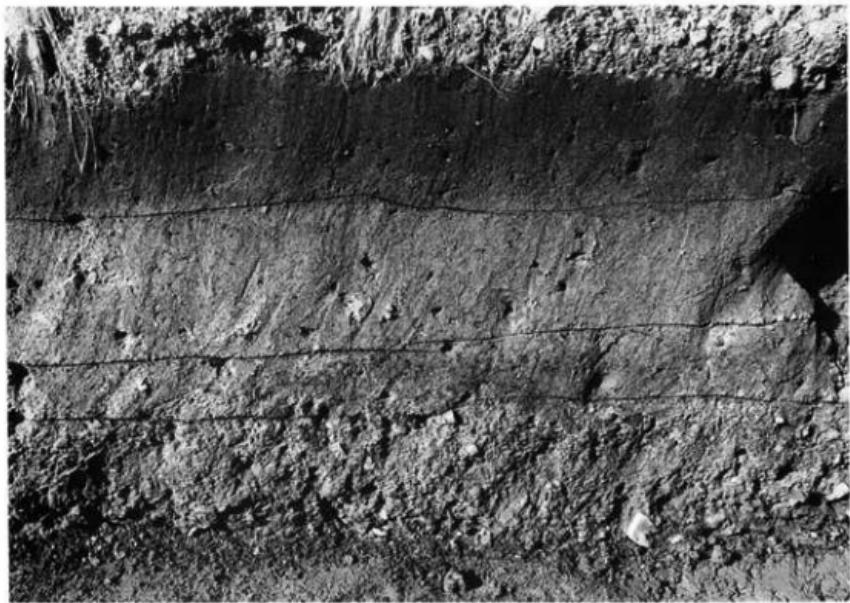
D III区 190—O D (南から)



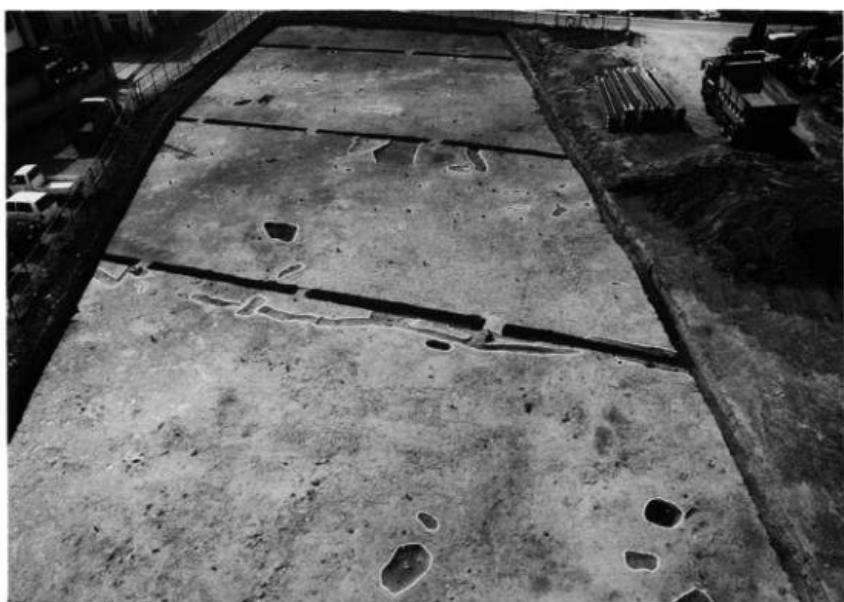
D III区 184—O S, 201—O O (東から)



D III区東側（西から）



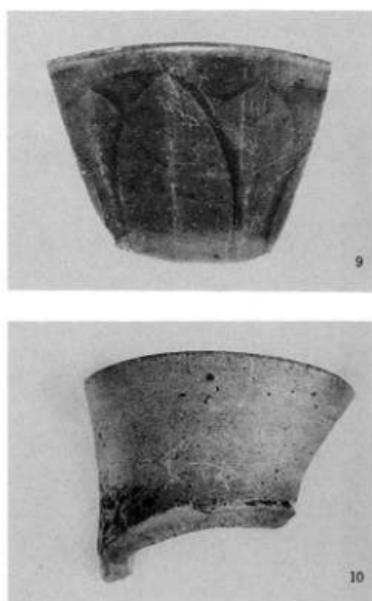
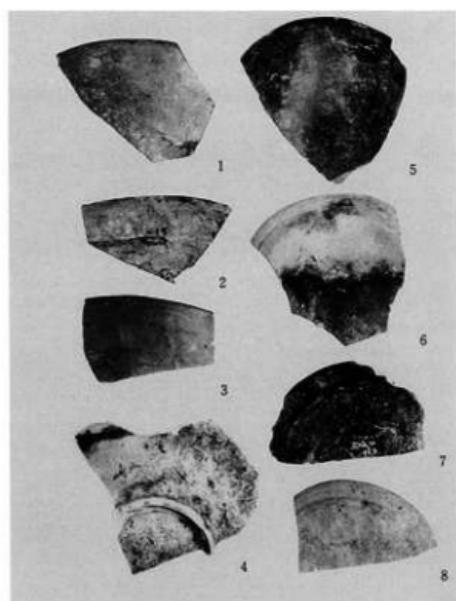
D III区北壁



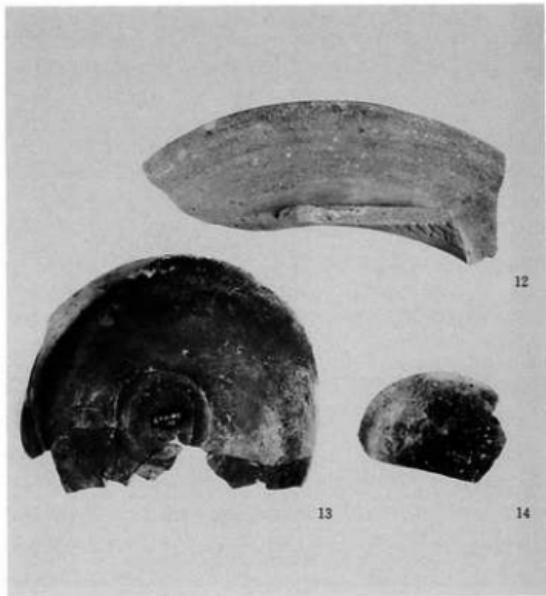
D I 区全景（東から）



E 区全景（北から）



III層出土遺物 (1~10)



528—O R 直上出土土器 (11~14)



調査地遠望（C地区から）



1 Tr. 全景（西から）



2 Tr. 全景（東から）

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第81輯

三ヶ山西遺跡 II

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
発掘調査報告書

1994年3月31日発行

編集・発行 財團法人 大阪府埋蔵文化財協会

大阪市中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

